

巻 頭 言

プロフェッショナリズムとは

愛知県小児科医会副会長
津村 治男

さる5月に、愛知県医師会の「医療安全支援センター（苦情相談センター）講演会」を聴講した。演題名は「医療者のプロフェッショナリズム」、講師は北村聖先生（東京大学大学院医学系研究科 医学教育国際研究センター 教授）であった。

内容をすべて覚えているわけではないが、感じるものがあって紹介させていただくこととした。講演会に参加された先生もいらっしゃると思うが、医師のみでなく、看護師、医療事務員の方々も多く聴講されていた。

今まで医療安全の講演は、患者とのトラブルの事例報告とか感染対策の具体的方法のようなものが多かったので、恥ずかしながら「プロフェッショナリズム」というtermそのものも、またそれが「医療安全」とどう結びつくのか最初はピンとこなかった。冒頭で、プロフェッショナリズムは、現在の医学教育の現場では大変重要なテーマであり、これをどう教えたら良いのか、教える側も模索中であると言われ、戸惑いを覚えた。

さて、用語の説明であるが、「プロフェッション」は公共の利益に貢献する専門的な知識、技能を持つ職業で、「自分以外の他者への奉仕に用いられる天職」であるとされ、西欧社会ではもともと聖職者・医師・弁護士の三大職種を指して用いられていた。「プロフェッショナル」は専門職の集団や当事者を指し、「プロフェッショナリズム」はその行動やプロセスを指す。これらの定義やとらえ方は実際には多様で、かなり哲学的でもあり難解である。ここに出てくる「専門職」は、単なるエキスパートではなく、自らの力量、誠実さ、道徳、利他的奉仕および公益増進に貢献する意志を持つこと、そのすべてを社会から求められている。

講演では、2005年に発覚した一級建築士が構造計算書を偽造した耐震偽装事件（いわゆる姉齒事件）が一つの例として出された。一般の人にはその結論が正しいか正しくないか（偽装か否か）を容易に判断することのできないような専門的な仕事に就く人

には、職業倫理の確立が求められなくてはいけないことが示された。

医療者はとくに、公益性、道徳性、専門性が強く求められており、エキスパートとしての知識の習得と技術の研鑽のみではプロとは言えない。では、実際にどんな医師がプロと言えるのか、どんな医師を目指すべきなのか。これが、今回の医療安全講習会の一つの主題のようであった。

講演会の場では、「プロの医療者とは何か、どんな医療者になりたいか」について、近隣の席の数人ごとの聴講者の間で意見をまとめて順に聞き取りが行われた。「職務を全うする情熱と責任感」、「患者の気持ちに寄り添う。共感的対応」、「言い訳をしない」、「幅広い生涯学習」等々の意見が出され、その場ですぐに入力されてスクリーンに示された。言葉にするとごく当たり前のことばかりであるが、この場で不思議と新鮮な印象を持った。講演会終了時には21の項目におよんだその一覧表が聴講者全員に配られた。

医師憲章やナイチンゲール誓詞のスライドが示されたが、実際の医療現場ではプロフェッショナリズムが試されることが日常的とされ、いくつかの例も提示された。

例えば、患者さんからの謝礼や差し入れなどは、多くの病院では一律に断っているところが多い。しかし、高額ならダメだがごく少額なら構わないと考える人もいるであろう。個人の診療所なら問題ないと考えている人も多いと思う。また、入院していた年老いたおばあちゃんが、退院するとき世話になった研修医に対して、「これで本を買ってもっと勉強してください」と何千円かの図書券を差し出した。それは断るべきなのかどうか。

メーカーが無償で配っているボールペンやメモ用紙、カレンダーなど、何も気にせずに使用している人が多いと思うが、そこにはメーカー名や商品名が記載されている。そのような名入れの商品の使用を禁じている医療機関もあるとのことである。

正直、何が正しくて何が正しくないのかを一律に判断することは困難である。教育の場でプロフェッショナリズムをどう教えたらよいか模索中であるのもうなずける。

最近では、看護学校の戴帽式のように、医学部でも臨床実習に入る前に白衣授与式を行い、臨床系の教授から一人ひとりに白衣を着せてもらう儀式を行う大学が増えてきているとのことである。このときに両親を呼ぶところもあるそうである。

プロフェッショナリズムの勉強には、指導者がロー

ルモデルとして行動していることが重要である。しかし「隠れたカリキュラム」の存在が問題で、「患者さんには十分に説明しなさい」「患者さんと医師との関係は重要である」と説いておいて（本来のカリキュラム）、実際には忙しいと言って十分な説明をしなかったり、患者さんを怒鳴っていたりする姿を学習者（研修医）に見せ、無言のうちに言行不一致になっていることが実際の現場ではある。学習者にとっては「隠れたカリキュラム」のインパクトは強いようである。

プロフェッショナルリズムの教育はまだ確立していないとのことであるが、我々は常に背中を見せているロールモデルの役割から逃れることができない立場にあることは確かである。